

タイ・日接触場面における「誘い／依頼－断り」談話における弁明の発話行為の研究

Triktima LEADKITLAX

1. 本稿の背景と目的

日本社会もタイ社会もコミュニケーションをするには、「言語的」、「社会言語的」、「社会文化的」な知識が必要である。しかしながら、様々な社会があるのと同様に、それぞれの社会に適用されるコミュニケーションの運用能力が存在する。さらに、言語を運用する際には、場面によって異なる性質があり、様々な社会の文化またはその社会のルール（社会規範）に応じて言語の使用を選択しなくてはならない。

本研究では、タイと日本との間で社会文化的相違があると思われる「弁明」という発話行為に特に注目し、タイ人日本語学習者と日本語母語話者による「誘いの断りによる弁明」と「依頼の断りによる弁明」を通して行われる、ポライトネスの管理について分析していく。また、本研究はポライトネス理論 (Brown&Levinson 1987) と言語管理理論 (ネウストプニー1999) に基づいて、非日本語母語話者 (以下、NNS) と日本語母語話者 (以下、NS) による接触場面における弁明の発話行為とその規範を考察することを目的とする。

2. 先行研究

2.1 「弁明・言い訳」に関する研究

弁明や言い訳に関する研究は、意味公式の機能⁽¹⁾によるものが多く見られる (藤森 1995、西村 2007、都・崔 2010)。「弁明」は、「断り」などで相手との間に生じた不均衡を修復するための言語行動だと考えられる。「弁明」は、相手の意向に沿えない理由の表明によって自己の領域を確保するという対人相互作用機能を果たしている。そして断り行為を成立させるために重要な機能を果たしていると考えられる (藤森 1995)。次に、劉珏、肖志 (2008) は、弁明において具体的な理由を述べることは客観的な事実に基づいて情報を提供しているため、より説得力のある断り戦略であるとしている。また、断る側は客観的な事実を理由にすることによって、断りによる FTA (2.2 ポライトネス理論参照) を緩めることができると述べている。

2.2 ポライトネス理論

Brown and Levinson (1987) (以降、「B&L」と略) のポライトネス理論 (politeness theory) とは、社会的な人間関係の中で、円滑なコミュニケーションや人間関係を維持するために、人々はどのような言語的な戦略を用いるのかに関わる理論である。言語行動的な視点で言うと、ポライトネスとは、会話の場において表現・伝達される、自分や相手のフェイスを侵害することに対する軽減的・補償的な言語的配慮のことである。

ポライトネス理論で中核を成す概念は、「フェイス侵害」FTA (Face Threatening Act) である。人間には、他人に理解や称賛をされたいというポジティブ・フェイスと、他人に邪魔されたくないというネガティブ・フェイスの2つのフェイスを保ちたいという欲求があるとしている。B&Lは、この2つのフェイスを脅かさないように配慮することがポライトネスであると操作的に定義した。そして、それぞれに相手のポジティブ・フェイスを配慮(働きかけ)する戦略と、ネガティブ・フェイスを配慮(尊重)する戦略がある。このフェイスのどちらか一方、あるいは両方を脅かすような行為をFTAと呼ぶ。FTAは、話し手と聞き手の社会的距離と、話し手と聞き手の力関係と、相手にかかる負担の度合の和で表され、負担の度合は文化によって異なるとされている(B&L1987)。

2.3 言語管理理論

言語と文化の異なる個人と個人がコミュニケーションを行う場面を異文化接触場面(以下、接触場面)と言う。言語管理理論(ネウストプニー1995)とは、接触場面における言語学習者の規範⁽²⁾からの逸脱、その逸脱に対する留意・評価、調整計画、逸脱を修正するための調整戦略等の調整過程を段階ごとに説明したものである。この言語管理理論は異文化間インターアクション研究で多岐にわたり適用されてきている。

ネウストプニー(1999)は規範からの逸脱があった場合、次のような管理プロセスが存在するとしている。(1) 言語的・社会言語的・社会文化的規範からの逸脱がある、(2) 参加者によってその逸脱が気づかれる、(3) それらが否定的或いは肯定的に評価される、(4) 評価された逸脱が調整対象となる、(5) 調整方法が選ばれる、(6) 調整が実行される。

すべての逸脱が上記の調整段階にまで至るわけではなく、プロセスの途中で終了し、表面化しない場合も想定される。そのため、参加者に内省を行ってもらうフォローアップ・インタビュー(以下、FI)が非常に重要な研究手段となる。また、規範が逸脱なしにコミュニケーション行動に適用された場合、参加者は無意識のうちに規範を適用していることが多いため、FIの使用によって規範の意識化が可能となる場合がある(加藤2011)。

尚、ここで明記しておかなければいけないことはこの規範とはだれによって規範と判断されるかという点である。言語管理理論の研究は基本的に具体的なインターアクション行動を研究対象としているが、規範であるかどうかはあくまでもそのインターアクションに参加している人がどう感じているかに依拠している。したがって、FIによる参加者の内省データは非常に重要なものと見なされている。同時に参加者のインターアクション行動からもその参加者の持つ規範が推測されることも多いが、その場合も基本的にFIでの確認がなされることになる。本研究でもこの考え方を踏襲する。ここで、日本語母語話者の持っている規範は、「日本語規範」、タイ語母語話者の持っている規範は、「タイ語規範」と呼ぶことにする。

3. データ収集調査・ロールプレイによる弁明談話の調査

本研究では、「日本人の誘いに対するタイ人の断り」と「タイ人の依頼に対する日本人の断り」という2つの接触場面について調査するため、タイ人日本語学習者（以下、タイ人⁽³⁾）と日本語母語話者（以下、日本人）によるペアに、それぞれの場面のロールプレイ（以下、RP）を行ってもらった。さらに、ロールプレイの文字化後、FIが行われた。被調査者となったペアは8つで、いずれも実際の友人同士である（詳細は表1を参照）。データは2011年7月12日から10月23日の期間に収集された。

表1 被調査者のプロフィール

	日本人	タイ人		
	学年 (年齢)	学年 (年齢)	日本語レベル	滞在期間
ペア1 (女)	4年 (21)	研究生1年 (25)	中級	1.5年
ペア2 (男)	2年 (19)	2年 (20)	中上級	3年
ペア3 (女)	2年 (19)	4年 (23)	上級	5年
ペア4 (男)	4年 (21)	2年 (28)	中上級	2.5年
ペア5 (女)	4年 (21)	大学院1年 (28)	中上級	1.5年
ペア6 (男)	4年 (21)	4年 (22)	中上級	4年
ペア7 (女)	1年 (19)	4年 (23)	上級	5年
ペア8 (男)	3年 (24)	4年 (23)	上級	5年

本研究では、ロールプレイを行うに当たって、まずロールカードを作成した。カードには役割、状況を記述し、日本語版とタイ語版を用意した。

表2 ロールカードの役割設定

映画に誘う側	(A) (日本人) 役割：誘いをする人 状況：あなたは見たい映画があります。友達も好きそうな映画なので、友達と一緒にいこうと思っています。友達を誘ってみてください。 出来るだけ自然に話してください。
誘いを断る側	(B) (タイ人) 役割：誘いを断る人 状況：あなたの友達はあなたを映画に誘いました。あなたはこの映画が見たいと思っていますが、友達の誘いを断ってください。 出来るだけ自然に話してください。

スーツの借用を 依頼する側	(A) (タイ人) 役割：依頼をする人 状況：あなたは来週、先輩の卒業式に参加します。参加するためにスーツを着たいと思っています。あなたは、スーツを持っていません。友達にスーツを借りるお願いをしてください。(卒業式が来週の金曜日なので、友達に来週の木曜日までに学校に持ってきて欲しい) 出来るだけ自然に話してください。
依頼を断る側	(B) (日本人) 役割：依頼を断る人 状況：あなたの友達は、あなたのスーツを借りたいと言いました。あなたは、友達が着られそうなスーツを持っていますが、友達の依頼を断ってください。出来るだけ自然に話してください。

次に、8 ペアの被験者に RP の状況設定をしたカードを理解できるまで読んでもらう。その後、カードのセッティング通りに会話を行ってもらい、録音機器により記録する。

4. 調査結果とデータ分析

RP の談話については、ポライトネス理論と言語管理理論の管理プロセスを用いて、タイ人と日本人が参加する「誘い／依頼に対する断りや弁明談話」における日本語接触場面を分析する。

談話の中で弁明があった場合、「弁明する側」と「弁明される側」の言語表現をポライトネス理論のポジティブ・ストラテジー（以下、PS）、あるいはネガティブ・ストラテジー（以下、NS）の観点から分析し、さらに管理プロセスに基づき、言語の使用者が実際の談話においてどのような問題を感じているのかについても分析を行う。また弁明があった場合、「弁明」の部分では、「弁明の表現」の観点から分析を行う。

最初に、「弁明表現」とは、会話の中でどのような表現を用いて弁明が行われるのかを指すものとする。

先述したように、弁明には具体的な弁明と曖昧な弁明がある（劉、肖 2008）。

- (1) 具体的な弁明：本研究の依頼と誘いに対する具体的な弁明は、大きく3つに分けられる。
 - (a) 義務的要因による弁明：自分には責任がなく、外部にある何らかの義務的な要因により、依頼あるいは誘いを受け入れられないことを言う弁明のタイプ。
 - (b) 私的要因による弁明：私的・個人的な都合により依頼や誘いを受け入れられないことを言う弁明のタイプ。
 - (c) 物理的要因による弁明：自分や相手に問題があるのではなく、何らかの物理的に不都合な状態のため依頼や誘いを受け入れられないことを言う弁明のタイプ。

(2) 曖昧な弁明：話し手が自分のネガティブ・フェイスを傷付けないように曖昧な表現でごまかすという意図から、はっきりと理由を言わない弁明のことである。

4.1 日本人の誘いに対するタイ人の断りと弁明の特徴

タイ人の断りと弁明の特徴を具体的な会話例から見ていくことにする。

会話例1 日本人男性（誘う側）とタイ人男性（断る側）の談話
(省略)

11. J02：いかねえ？一緒に行こう。
12. T02：「X-men」、ス？
13. J02：そうそうそう。お前好きなの。
14. T02：ねー。わ、なんか・・・この映画で、デートするの…
15. J02：デート？
(中略)
21. J02：いいよ。もう一回行こう。
22. T02：やー、別に俺 <笑い>、そんなにお金ないよ。
(中略)
30. T02：あそう、それはそうだけど、お金ないから、お前出してくれんの？
31. J02：だからちょっと俺も
32. T02：だから出してくれる。
33. J02：・・・いや、行こ行こ行こ行こ。俺もWさんについて行けばいいし。
(後略)

FI時にはJ02は、「日本人同士ならここまでしつこく誘わない」と述べており、内的場面におけるJ02の持つ規範が緩和されていることを示している。T02は、相手のポジティブ・フェイスの侵害を小さくするためにすぐに断りを行わなかった。これもPSの一つだろう。さらに、断る際に弁明が多く見られ、最初に用いた弁明は、ターン14で、「同じ映画を他の人と見る」という「私的要因による弁明」で、「具体的な弁明」だと言えよう。ただし、このような弁明は、個人的な都合によるもので、J02は自分にはあまり説得力がないと、FIで語っている。

J02はまた誘いの発話行為を試みたが、T02はターン22で、「お金ない」という弁明をしている。これも「私的要因による弁明」で、「具体的な弁明」だが、J02はT02が飲み会などでお金を使っていることを知っており、お金がないという弁明は、うそっぽいという否定的な評価をした。

またT02は、本来タイ人同士なら最初から直接断ったり、好きな映画じゃないなら他の映画に変えたりするなど、提案を出すかもしれないとFIで述べている。さらに、相手が日本人であるという意識があつて、直接断るのは良くないと判断し、弁明で間接的に断りを行ったと語っている。つまり、この談話では内的場面におけるタイ語規範が緩和すると同時に日本語規範を強化してお

り、相手のネガティブ・フェイスを顧慮している NS を使用していると言えよう。

会話例 2 日本人男性（誘う側）とタイ人男性（断る側）の弁明談話

（省略）

9. J04: 俺は、なんか「ミッション・インポッシブル 4」見たいと思ってたんだよねー。

10. T04: え、ほんとに。

11. J04: うーん、それって、あまり興味ない？

12. T04: 興味ない、ごめん。

（中略）

15. J04: あー、まあ、そうかもしれないね。でも、あ、じゃあ、こういうのはどう？・俺 T04 と
もっと仲良くなりたいから、（うん）その「ミッション・インポッシブル」も行ってその後も
「ハリーポッター」も見るっていうのはどう？

（中略）

22. T04: ちょっと考えてみます。（うん）ね、なんか今日はちょっと、なんか予定があるから。

23. J04: あ、そうなの？

24. T04: いい？ごめん。

25. J04: 休めないの？予定。

26. T04: 休めないわ、なんかバイトだからさ。（後略）

T04 がターン 12 で、「私的要因による弁明」を行ったにも関わらず、ターン 15 で J04 が再び誘いを繰り返したため、T04 は、“今日は予定がある”という「曖昧な弁明」の発話行為を行った。断りに対する J04 の返答は、また「情報要求」であったため、T04 はターン 26 で、“アルバイトがある”という「義務的的要因による弁明」で間接的に断りを試みた。

T04 は、タイ人同士だとここまで誘われることはないだろうと J04 に対して、しつこいという否定的評価をした。つまり、タイ語規範を適用しておりそこからの J04 の逸脱を否定的に評価している。自分が「私的要因による弁明」を行ったにも関わらず、J04 がまた誘いを繰り返したため、T04 は、“今日は予定がある”という「曖昧な弁明」の発話行為を行った。断りに対する J04 の返答は、また「情報要求」であったため、T04 はターン 26 で、“アルバイトがある”という「義務的的要因による弁明」で間接的に断りを試みた。さらに、自分が相手の誘いに応じたら困ったことになるという、自分のネガティブ・フェイスを顧慮した NS でありながら、タイでも日本でも仕事を休むことはよくないという共有する規範を主張する一種の PS を使用した。

FI 時に、タイ人同士なら直接的に「行かない」や「行きたくない」とはっきり言う T04 は、相手が日本人であることで、意図的に直接的な断りを避けたと述べている。つまり、この談話では、T04 は相手が日本人ということ意識しながら発話行為が行われたと考えられる。T04 は、タイ

語規範を緩和し、日本語規範に沿って断りの発話行為をしていると言えよう。

4.2 タイ人の依頼に対する日本人の断りと弁明の特徴

日本人の断りと弁明の特徴を具体的な会話例から見ていくことにする。

会話例3 タイ人男性（依頼する側）と日本人男性（断る側）の弁明談話
（省略）

6. J06 : 木曜日? (うん) スーツね、今、どこあったっけな。汚いし。
7. T06 : お、良いよ。俺、洗濯代 (払ってくれる?) 払ってくれる。
8. J06 : いややー、ダメよ、自分で<笑い>もってちゃんとやるわ。今は汚いから。
9. T06 : じゃあ、貸してくれる。
10. J06 : いや、ちょっと無理だな、無理無理。 (後略)

J06 は T06 の依頼に対して、ターン4で「無理なんだ」という「曖昧な弁明」を行っている。T06 はそれを無視し、再び依頼の交渉をした。J06 はターン6で「スーツね、今、どこあったっけな。汚いし」という発話をした。これは、曖昧な表現で T06 の質問に答えながら、「汚いし」という「物理的要因による弁明」を行っている。T06 は、断りの返答として、「代案」を出しているが、J06 はさらに「汚い」という「物理的要因による弁明」及び、「無理」という「曖昧な弁明」を行っている。これに対して、T06 は FI 時に J06 の弁明では、貸したいという気持ちが感じられないと否定的な評価をした。

会話例4 タイ人男性（依頼する側）と日本人男性（断る側）の弁明談話
（省略）

4. J05 : あ、ほんと? やーでも、私のスーツ、汚いから、いや、卒業式には着られないよ。
5. T05 : え、本当? でも、なんか他の友、タイ人の友達が持ってない。
6. J05 : あ : ほんと?
7. T05 : 汚いなら私が洗濯して。
8. J05 : あーでも、すごく汚いよ。

(中略)

22. J05 : あ一分からない。でも、私のスーツはちょっと、汚いから、かせられません。
23. T05 : はい、分かりました。が、なんか私インターネットで調べます、(はい) レンタルするところ。 (後略)

この談話の場合は、J05 は、日本人同士なら「汚い」などの弁明で間接的に“断っている”ことを分かってくれるが、相手が外国人だと、なかなか分かってくれないと FI で述べている。そして、出来れば直接的な断りは避けたいが、日本人のやり方だとわかってくれない為、ターン22で「汚

いから、かせられません」という表現で直接的な断りを行ったとコメントしている。

この二つの会話例で見られたように、他のペアの RP でも、日本人はタイ人の依頼に対して、「謝罪」よりも「弁明」を多く用いた。タイ人は日本人に断られても再び依頼を繰り返すことが多く見られ、それに対して日本人はやむを得ず直接断りを行うことがある。これは本研究のロールプレイの設定では、日本語母語話者側に再依頼は好ましくないとする規範が活性化していたためだと思われる。

会話例 5 タイ人男性（依頼する側）と日本人男性（断る側）の弁明談話

（省略）

4. J08: いや、俺持ってるけど、来週、ちょっと就職活動が、（就活？）うん、あるから。いや貸せないな。
5. T08: あー、スーツ一個しかない？
6. J08: そう、少ないんだよ。（あー）うん、もっている数が少なくて、また T08 に、あー同じくらいだと思うんだけど、あー（あー）ごめん、残念だ。
7. T08: そう、またなんか、（「小さい声で」ごめんね）知っている友達とか、スーツ持っている（うん）友達とかいる？
8. J08: あ、いるね。T08 くらいの、そうだな何人かいると思う。
9. T08: まじで、じゃあ、ごめん！紹介してくれない？
10. J08: あーどうだろう。そいつらも多分就活で忙しいかもしれない。この時期はやっぱ就職活動は大変でしょ？だから、うん、難しいかなー。（後略）

J08 は「来週、ちょっと就職活動が、うん、あるから。いや貸せないな」という「具体的な弁明」である「義務的要因による弁明」を行って、不可能である旨を表明している。これは直接な断りよりも相手のポジティブ・フェイスを顧慮した発話であろう。T08 は、相手が日本人であることを意識しながら、日本語規範に沿った依頼の発話行為を行っていたと FI でコメントしている。さらに、内的場面では、依頼するにしてもここまで相手に遠慮しないと語っている。つまりここでは、T08 はタイ語規範を緩和し、日本語規範に沿って依頼を行ったと言えよう。

さらに、T08 はターン 6 で、相手の“残念だ”という表現で間接的に断られ、相手のスーツを借用する事はできないと判断したと述べている。ターン 7 で、T08 は就職活動のスーツの他に、日本人はいろいろなスーツを持っているので、別のスーツを借用することができるかもしれないと思い、再び依頼を行ったと、FI 時に述べている。一方、これに対して、J08 は友達のスーツまで探すのは困るという否定的な評価をし、再び依頼を断った。

5. 結論

5.1 タイ・日接触場面における「誘い－断りと弁明」 & 「依頼－断りと弁明」談話

本研究ではタイ人と日本人の接触場面における、「日本人の誘いに対するタイ人の断りと弁明」と「タイ人の依頼に対する日本人の断りと弁明」の談話を、ポライトネス理論と管理プロセスの概念を用いて分析を行ってきた。RPの分析からはそれぞれの規範が相手言語規範に近づいたり、母語規範の転移が起こったりするなどの様子が観察されており、両者とも内的場面規範をそのまま使用しているわけではないことが見られた。

以上の結果から、接触場面では、日本人もタイ人も母語規範を緩和し、相手言語規範に近づいていることが分かる。内的場面では直接的な断りをするタイ人は「弁明」を間接的な断りとして、日本人の誘いを断る傾向がある。タイ人がよく用いるのは、内的場面とは違う、「義務的要因による弁明」である。これは、友好的な関係を保つため使われたポジティブ・ストラテジーだが、問題を起こす原因になる可能性があると考えられる。また、今回の調査で分かったことは、「私的要因による弁明」は日本人にとって否定的な評価を導く可能性が高いという点である。

タイ人はタイ語規範の転移が生起し、内的場面と同様の依頼の発話行為を行う傾向がある。さらに、日本人に断られても依頼を繰り返す可能性が高く、それに対して日本人は否定的な評価をしている。日本人はタイ人の依頼に対して、「謝罪」よりも「弁明」を多く用いるが、タイ人に依頼を繰り返されると、問題を調整するストラテジーとして、やむを得ず直接的な断りを行う可能性がある。

5.2 日本語教育への応用と今後の課題

先に述べたことから、日本人もタイ人も、接触場面では母語規範を弱めて、接触場面規範が生起することが予測できる。従って、日本語学習者にとっては、「誘い」「依頼」「断り」「弁明」に関するそれぞれの機能は勿論であるが、日本語規範の学習、自国の母語規範との比較・考察をする作業も必要だと考えられる。双方にどのような規範があり、いかに運用されているのかについて相違点や類似点などを考えさせることで、学習者のコミュニケーション能力向上につなげることができるであろう。

本研究では、タイ人と日本人の接触場面を題材にして「誘い／依頼－断り・弁明」の発話行為の分析・考察を行った。しかし、タイ語規範と日本語規範を調べるのに、内的場面のロールプレイを行っていなかったため、FIで被験者にインタビューしたものをデータとせざるを得なかった。また、本研究で用いられたポライトネス理論では、フェイス侵害度に影響を及ぼす三つの要素である「親疎関係（社会的距離）」「力関係」「負担度」のうち、「負担度」の要素しか考慮に入れて分析を行っていない。今後は親しくない者同士や異性の場合や、目上・同等・目下といった関係における「誘い－断り」「依頼－断り」の談話場面を設定するなどが必要である。

最後に、本研究では、実際のデータを取ることが困難であるため、ロールプレイ方式でデータ収集を行った。しかし、このロールプレイ方式によって得られた会話データが自然であるかどうかという疑問も残る。より自然なデータを収集するための研究方法の構築も今後の課題である。

注

(1) 意味公式 (Semantic Formula) とは、Beebe ら (1990) が断りの発話行為を分析する際に使用した分析方法で、「断り」表現の構造をより細かく分析するために、断り表現の前後にある発話を機能別に分類した枠組みである。

(2) 接触場面の参加者は、目標言語の使用において自分の母語規範、目標言語の規範、目標言語の規範でも母語規範でない第 3 の言語規範(中間言語規範)を適用し、言語表現を生成することがある。

(3) 本研究は非日本語母語話者全体を NNS と略しているが、今回の調査はタイ人日本語学習者に限定したため、NNS とは略さず、「タイ人」と略し、日本語母語話者は「日本人」と略することにした。

(4) 同じ母語話者同士の会話を指す。

参考文献

- Brown,P. and Levinson,S.C. (1987) Politeness : Some Universals in Language Usage (Studies in Interactional Sociolinguistics) Cambridge University Press.
- 伊藤恵美子 (2005) 『マレー文化圏における断り表現の比較—ジャワ語・インドネシア語・マレーシア語の発話の順序に関して—』「国際開発研究フォーラム 29
- 尾崎明人「異文化接触場面のコミュニケーション研究と日本語教育」『国際交流基金』
<https://www.jpff.go.jp/j/japanese/survey/tsushin/research/pdf/tushin32_p12-13.pdf> 2014 年 3 月 31 日
- 加藤好崇 (2011) 『異文化接触場面のインターアクション—日本語母語話者と日本語非母語話者のインターアクション規範—』 東海大学出版会
- 滝浦真人 (2008) 「ポライトネス入門 Politeness」 研究社
- 都恩珍・崔善美 (2010) 「断り」に対する「応答」の意味公式—日本語母語話者と中国人・韓国人日本語学習者の事例比較—『桜花学園大学人文学部』研究紀要 第 12 号
- ネウストプニー, J.V.・宮崎里司 (1999) 『日本語教育と日本語学習—学習ストラテジー論に向けて—』くろしお出版
- ネウストプニー, J.V.・宮崎里司 (2002) 『言語研究の方法—言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために—』くろしお出版
- 藤森弘子 (1995) 「日本語学習者にみられる「弁明」意味公式の形式と使用—中国人・韓国人学習者の場合」『日本語教育』87 日本語教育学会
- 劉珏、肖志 (2008) 「断りの発話行為の伝達効果について : 誘いに対する断りの理由を中心に」『福井工業大学研究紀要. 第二部』福井工業大学